第 5 章

結論及び提案

5.1. 結論

本研究の結果をまとめると以下の 3 点があげられる。

5.1.1 IJFLの視点の置き方習得。

図 1 授与動詞使用の割合

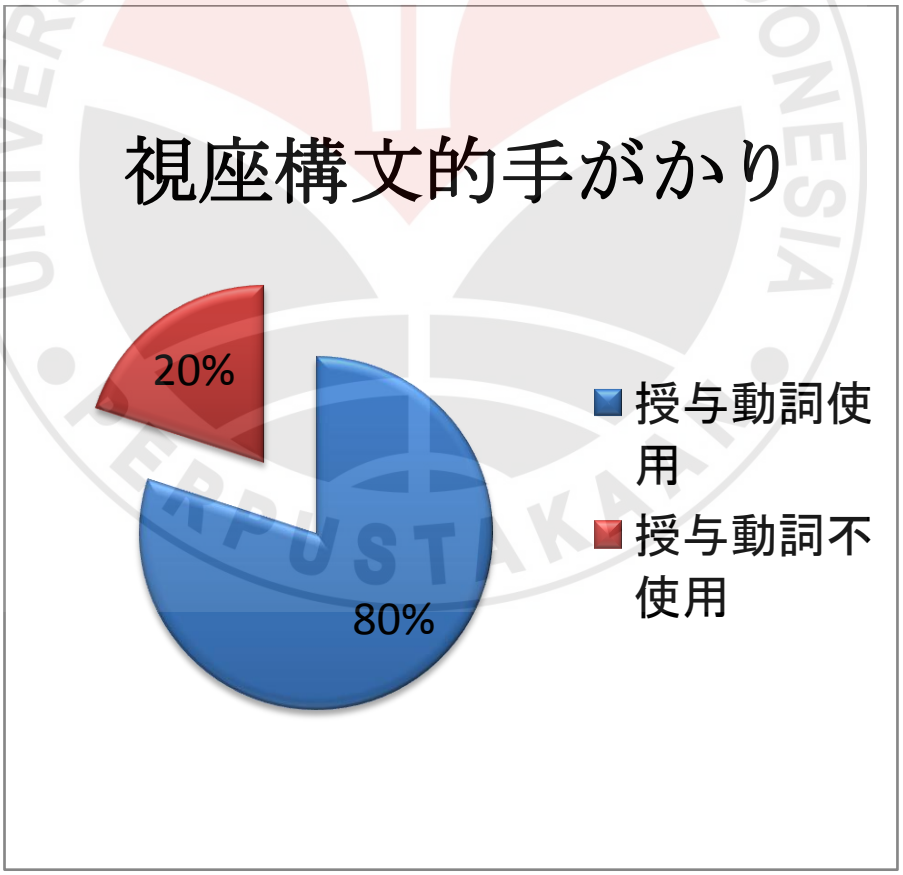

図 1 は、IJFL が漫画のストーリでどれくらい授与動詞を使っているかを示したものである。これを見ると、IJFL の授与動詞使用の割合が 80%あり、残りの 20%は授与動詞使用しないことである。談話を展開する際に、

調査対象として漫画に授受表現を使用すべきの記述はしなく、展開する方法は自由である書いても、IJFL は授与動詞の使用傾向を示したものである。このことから、IJFL にとって授与動詞使用が習得されやすいと考えられる。

図２視点の置き方タイプ

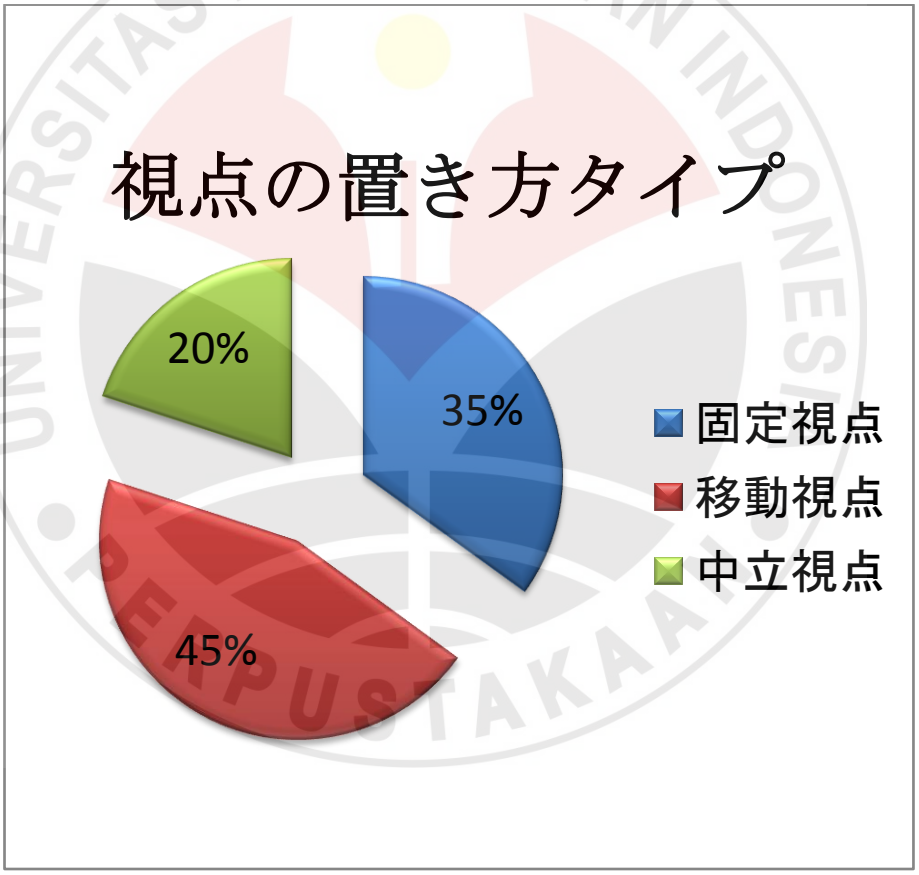

図２は、IJFL の視点の置き方タイプを示したものである。20 名調査対象者のうち、35％しか「固定視点」で談話を展開しなかった。一方、45％は「移動視点」で、20％のは「中立視点」で表す。IJFL は授与動詞使ってある一定の人物に視点を固定し、ストリーを展開させることができない

と考えられる。以上のように、IJFL は談話における視点の固定はよく習得されていない。

5.1.2 「視点の一貫性」による、適格文と自然文から見たどのような、IJFLの談話の視点習得

図３授与動詞文使用の適格性の割合

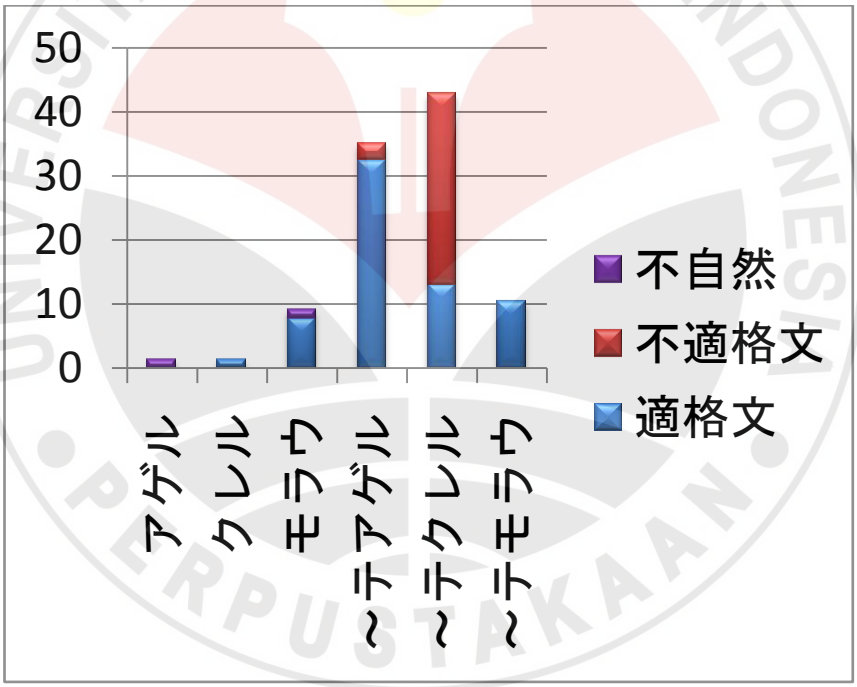

図３は、授与動詞文使用の適格性の割合 を示している。談話を展開する際に、「視点の一貫性」から見たIJFLの授与動詞文の習得は、データが示すように、授与動詞の「～テアゲル」の27文うちに、92, 59%は適格文で、残りの7,41% は不適格文である。他方、「～テクレル」は、33文うちに30,30% しか適格文がなく、残りの69,70% は不適格文である。このこと

から、「～テアゲル」構文の習得が一番習得しやすいと言える。一方、「～テクレル」は習得が良くないことを示している。

図４視点のハイアラーキー」から見た授与動詞文の適格性の割合

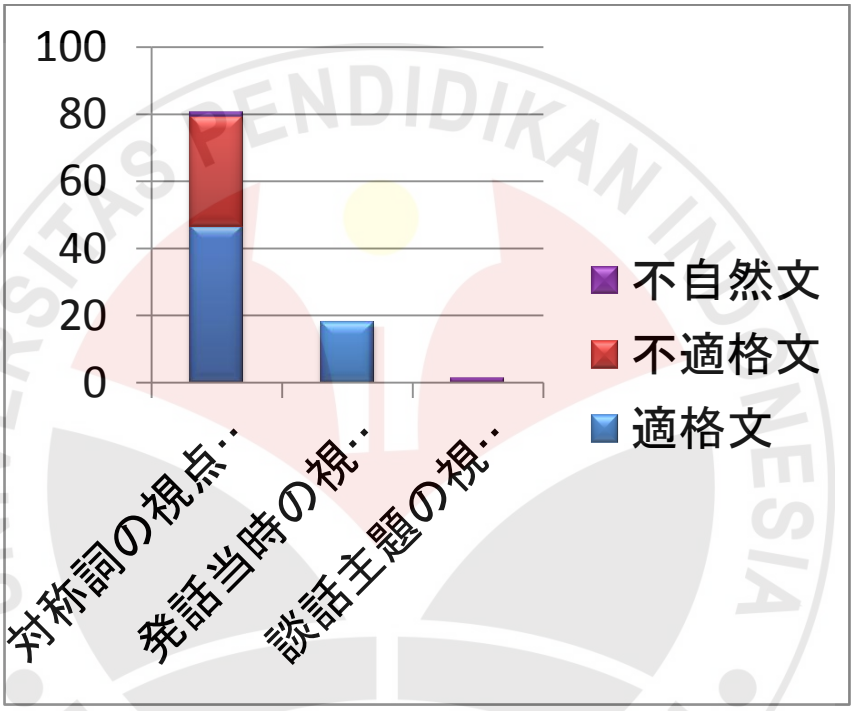

図４は、視点のハイアラーキー」から見た授与動詞文の適格性の割合を示したものである。談話を展開する際に、「発話当時の視点ハイアラーキー」の授与動詞の14文うちに100% は適格文である。一方、「対称詞の視点ハイアラーキー」の授与動詞の62 文うちに、58,06% しか適格文がなく、残りの41,94% は不適格文であることを示している。「視点の一貫性」から見たIJFLの視点習得は、「視点ハイアラーキー」のうち、「発話当時の視点ハイアラーキー」が一番習得しやすいことが分った。

図４と図５の結果見ると、「視点ハイアラーキー」は「授与動詞制約」との共感度関係は IJFL の適格文と自然文習得に影響があると考えられる。

談話を展開する際に、「視点の一貫性」から見た IJFL の視点習得は、「>」と「=」との共感度関係を持っている「視点ハイアラーキー」と授与動詞構文が習得しにくいことが分った。データ分析の結果によると、「>」と「=」との共感度関係を持っている「視点ハイアラーキー」と授与動詞構文で IJFL 談話文は不自然文になったことを示す。

5.1.3 第二言語の日本語で授受表現使用の談話を展開する際に、IJFLの談話の視点習得に母語の影響

本研究の結果で示したように、IJFL が談話における「固定視点」と「視点の一貫性」が習得できないことは IJFL の母語干渉が原因となっていることが強い傾向にある。 しかし母語干渉の原因以外、正の転移もある事を示したものであると考えられる。

母語の移動の影響からIJFLの視点習得に影響するものは、次のようである。

a. 干渉

1. データ分析の結果、IJFLが談話における「固定視点」を意識できず、ある一定の人物に視点を固定できないことが明らかになった。視座構文的手がかりとして授受表現を持ってないIJFLの母語干渉は原因となっている傾向がある。 つまり、授与動詞はmemberi-menerimaとの同じ方向(ほうこう)共感が見られないため、IJFLはある一定の人物に視点を固定することが困難なものになっていると考えられる。

それ以外、「中立視点」タイプの「インドネシア談話のsudut pandang orang ketiga」と、ある登場人物に視点を捉えるが、その他の人物にも視点を移動する「インドネシア語談話のsudut pandang campuran」を見ると、日本語談話での視点の置き方はインドネシア語談話のおき方とは異なっていると考えられる。それもIJFLの母語干渉が原因となっている傾向がある。

2. データ分析の結果、IJFLが談話を展開する際に、視点のハイアラーキーと授与動詞と視点の制約を注意せず、漫画だけに注意を向けた。ウチ・ソトを持ってないIJFLの母語干渉が原因となっていることと考えられる。

b. 正の転移

インドネシア語談話は「一人称視座（sudut pandang orang pertama）」もある。「一人称視座（sudut pandang orang pertama）」は「発話当時の視点ハイアラーキー」と同じ共感度関係を持っているため、IJFLは「視点の一貫性」の意識がなくしても、自ずと「視点の一貫性」の原則に反することなく、日本談話展開をさせた。母語からの影響が習得する際に良い方向に働く場合があると考えられる。一方、他の「視点のハイアラーキー」にはそんなに正の転移が起こっていないことを指している。

5.2. 提案

本研究は「視点」の分析に授受表現という限られた構文的手がかりしか用いていなかった。そのため、今後は移動動詞、主観表現、準感情表現、感情表現などの構文的手がかりを使用からみた、注視点を加え分析する必要性があると思われる。それ以外、本研究には、干渉として原因は見積もりに限り、まだ不明的なままである。これらのことは次に課題とし、調査をとして明確にしていきたい。

また、日本語教育では作文の授業と文法の授業に「日本語の視点」について教える必要があろう。